

生涯学習、公開講座、そして「英会話」

—「生きがい」の道しるべを求めて—

福原 慶尚

目 次

- I. はじめに
- II. 生涯学習と「英会話」の相関
- III. 「英会話」講座の概要
- IV. 実践例
- V. 結果と課題

I. はじめに

人は皆、時間の旅人だと言われる。その旅姿は、あたかも、らせん階段を登るかのよう、
「生物時間」の環を繰り返しながら、「物理時間」の矢が示す方向に進んでいるかのようである。

この矢は今、IT化、少子高齢化、グローバル化などの著しい21世紀の初頭を突き進んでいる。そんな中、旅人の中には「物理時間」に頓着して、「生物時間」を顧みなくなった者もいる。

その一方で、少子高齢化は人間性や生きがいを求め、例えば『フォール報告』¹などをひもとこうとする旅人をつくり出している。彼らは（財産・学歴・地位などを所有する）To Have 様式から、（人間性の回復、人格の完成を目指す）To Be 様式に、より高い価値をおく。それゆえに、彼らはその原点を求めて、生涯学習に参加しようとする者も少なくない。

生涯学習の視点から、公開講座に参加する旅人たちの取り組みを紹介するのが本稿の意図である。

II. 生涯学習と「英会話」の相関

「はじめに」でふれた「To Be 様式」を目指す生涯学習のキーワードは、人間性や生きがいの追及・実践・継承である。この様式では、「カネ・モノ」より「ココロ・コトバ」が優先する。

「ココロ」のふれ合いの端緒は「コトバ」。ところが、「和」の文化に馴染む日本人は積極的な「コトバ」のやり取り、例えば、

(1) ‘おはよう!’ ‘こんにちは!’ といった日常的な挨拶、

(2) 自分の考えや意見を論理的に発表する姿勢、

などに消極的である。このことは、「ホンネ」を言わない「和」の文化を助長し、あるいは、

(3) 相手の気持ち (つまり、他の文化) を理解し、共存しようとする態度、

を妨げかねない。

この消極性・閉鎖性に馴染む (あるいは、迎合する) 者は、‘口は災いのもと’ ‘沈黙は金’ ‘言わぬが花’ といった弁明をすることで、この文化・風土を隠れ蓑にしている。

この風土では、普通に「コトバ」のやり取りをする場合でも、相手の年齢・地位だけでなく、顔色を伺うという要素を伴う。これに輪をかける日本語の特質 (例えば、尊敬語・謙譲語・丁寧語といった「敬語」表現) も見逃せない。そうすると、いつでも、どこでも、誰とでも「コトバ」を交わすこと、つまり、「ココロ」を開くことは難しく、結局 ‘沈黙は金’ になりかねない。

思考方式や行動様式が他と異なることを好まない日本の「和」の文化を見つめ直す一つの方法は、欧米人の「個」の文化を学ぶことである。「個」の文化圏では、自分の気持ちや考えを相手にストレートに伝えるというヴァーバルコミュニケーション (verbal communication) が人間生活の基本で、上述の (1) - (3) はそのすべにほかならない。これが、日本人が彼らの「コトバ」を学ぶゆえんである。そのためには、世界の共通語「英語」²が手っ取り早い。ここに「英会話」が生涯学習の講座として位置づけられるゆえんがある。しかし、そのことは英語絶対主義、白人文化至上主義に迎合して、「和」の文化を否定し、日本の伝統文化・生活様式を相対的下位におくということではない。

Ⅲ. 「英会話」講座の概要

生涯学習から公開講座への延長線上に位置づけられた「英会話」講座は、「週末のカナダ旅行」と題して英会話の旅に出かけるという設定で行われた。

英会話は今や学校を中心に、インターネット、放送、出版などさまざまな場所・メディアを通して行われ、その動機も教養・実用・趣味とさまざまである。この多様性が本講座の枠組みづくりを困難なものにした。そこで次の3点を切り口に、この問題点に取り組んだ。

(1) 受講生の個人差 (年齢・動機など) の情報入手、

(2) この個人差を生かす教材・教授法の工夫、

(3) 以上から、本講座目標である「生きがい」の追求と実践。

これらの困難な点は、結果的にこの講座をより生産的なものにした。それらが社会人対象「英会話」講座の模索、試作の糸口になったからである。

次に、上記の(1) - (3)を考慮しながら、「目標」、「教案・教材」、「到達目標」、「評価」などの設定に着手した。

目 標³：

(4) 自分の考えなどを「基礎的な英語表現」で発表する。(Ⅱの(1), (2)に対応)

(5) そのために、「日常生活の身近な話題」とそれに伴う「具体的な場面」を設定して「積極的にコミュニケーション活動」を行う。

教案・教材：

教案・教材作りは、講座目標や受講生の個人差などを考慮して、

(6) おもしろく、わかりやすく、力のつくもの

に心がけ、教材(A4判)の素地に写真やカットを多く取り入れた。コトバが発信者中心の情報であるのに対し、映像や写真は受信者中心の情報だからである。

次表は、上記の(4)(5)に沿ってつくられた教案(curriculum framework)⁴である。

表 3 - 1 「英会話」講座の教案

	題 材	言 語 活 動 の 場 面
第 1 講	Self	バンクーバーに到着。ブラウン家の出迎えに、まず挨拶・自己紹介をして、カナダでの第1日が始まる。
第 2 講	Interpersonal Relationship	翌日の朝食時、日本の住所・家族・一日の生活などが話題にのぼる。
第 3 講	Responsibility	3日目。居間でくつろぎながら、ブラウン氏の仕事の話聞く。
第 4 講	Social Activity(1)	次の日、ブラウン夫妻と近くのショッピングモールへ買物に行く。日本へのおみやげも買っておきたい。
第 5 講	Social Activity(2)	5日目。ブラウン家の一人息子ジョンが近くのファーストフード店へ連れて行ってくれる。

第 6 講	Culture	その翌日、カナダでの生活に慣れた頃、日本の伝統文化を何か紹介してみたくなった。書道・茶道・剣道など腕の見せどころ。
第 7 講	Education	ブラウン家の夕食のテーブルで、生涯学習の取り組みについて、テーブルスピーチに挑戦してみる。カナダ旅行の良き思い出に。
第 8 講	Leisure	ブラウン家滞在の最終日。滞在中のおもてなしなどのお礼に、日本料理店で一緒に食事をとり、将来の再会を誓い合う。

この教案をもとに、教材テキスト⁵がつくられる。次表は、「教案」の第1講部分である。

表 3 - 2 教材テキストの一例

「自己紹介」に必要な情報	A. 基本表現	B. コミュニケーション活動 (A. と B. のペアワーク)
挨拶	Hello! How do you do?	It's nice to meet you.
氏名	Let me introduce myself. My name's Akiko Itoh.	(Shake hands with Akiko) Where are you from, Akiko?
出身	I'm from Tsuwano. It's a small town in Shimane.	Oh, Where's that? I see.
旅行目的	I came here to study English. Oh, thank you.	What's the purpose of your trip? You speak English pretty well.
趣味	I'm interested in music and sports.	What are your hobbies? That's nice. I like tennis, too.

夢	Well, I hope to make a trip to the moon! Thank you.	By the way, what's your plan for the future, Akiko? Oh, really? I hope your dream come true.
---	--	---

到達目標⁶：

本講座では、言語活動のレベルを (primary・intermediate・advancedのうち) 「primary」とした。本章(1)の「個人差」と(4)の「基礎的な英語表現」に配慮したためである。「基礎的な英語表現」とは、教材テキスト(表3-2参照)を用いた次の3つの言語活動で、この講座の到達目標となる。

- (4) a. 「基礎的な英語表現」を聞き取る。
- (5) a. 「日常生活の身近な話題」を英語で書く／話す。
- b. 「具体的な場面」で、簡単な会話のやり取りを成立させる。

評 価：

上記(4)(5)の言語活動は、受講生自らがいつでも評価できるように、次のような「チェックシート」を作成した。

表 3 - 3 評価表と使用例

		○	△	×
易 ↓ 難	テキストの英文を聞いて、理解できる。	✓		
	テキストの英文を参考にして、自分の考えを英語で書く／話せる。	✓		
	与えられた話題／場面で、基礎的な会話を成立させる。		✓	
	聞きたいことを質問できる。		✓	
	質問されたことに答えられる。		✓	

○：よくできる △：だいたいできる ×：できない

IV. 実践例

授業の展開をリアルタイムで紙上に再現することはできない。そこで、この章では授業実践例を次の(1) - (3)で、そのアプローチを(4)でそれぞれ紹介する。

- (1) 「題材」の広がり
- (2) 「言語活動」の流れ

(3) 「講座」の展開

(4) 「言語活動」の場面 (スナップ)

筆者は教案作りの際、初回から最終回までの題材 (表 3-1 参照) をタテ軸に、各回の「導入」から「まとめ」までの活動をヨコ軸に取ることにしている。

タテ軸は次表のように、空間的に切り取った「題材」を時系列に並べることで、受講生の自主的な活動がスムーズにできるよう配慮してある。

表 4-1 「題材」の広がり

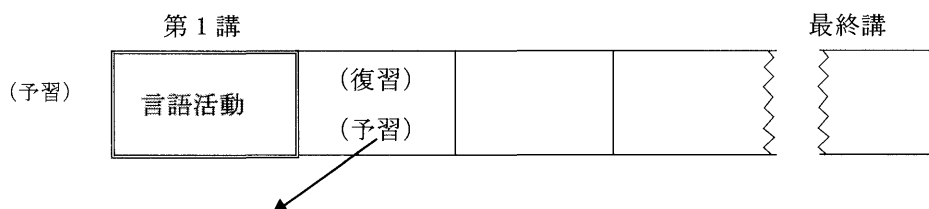
第 1 講	身近なことから (挨拶・天候・自己紹介など)
第 2、3 講	日常的なことから (一日の生活・家族・仕事など)
第 4、5、6 講	趣味や異文化交流 (買い物・スポーツ・伝統文化など)
第 7、8 講	夢や生きがい (老後の生活・夢など)

一方、ヨコ軸に配列された題材の言語活動⁷ (表 3-2 参照) は自分の言いたい情報の内容と流れを左から右にまとめてある。

表 4-2 「言語活動」の流れ

Introduction	Listening Speaking	Dialogue	Task
あ い さ つ 復 習 新 情 報 の 提 供 役 割 分 担 な ど	「基本表現」の理解 Q & A	「基本表現」の 暗記・練習 (ペアワーク)	「基本表現」の ド ラ マ 化 評 価 Q & A

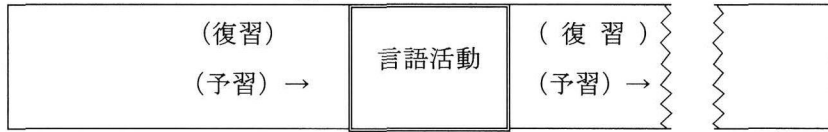
図 4-1 講座の展開



第2講



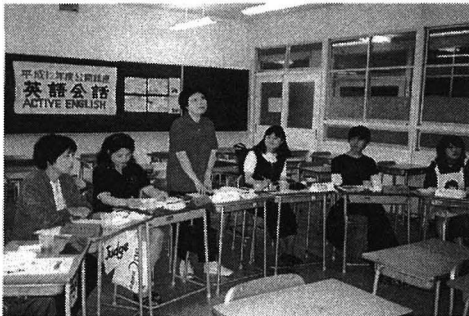
第3講



() : 家庭学習

上の図は、本講座のように実施回数の少ない言語活動が、その場限りのコマ切れにならないように、また、受講生の学習に反復性と継続性を持たせるため、スイッチバック式になっていることをイメージ化したものである。この方式は外国語学習理論の「準備の法則」(Law of Readiness)、「練習の法則」(Law of Exercise)、「強化の法則」(Law of Reinforcement)に基づく⁸。

さて、「百聞は一見に如かず」と言う。表3-1の「言語活動の場面」のいくつかをスナップで紹介する。



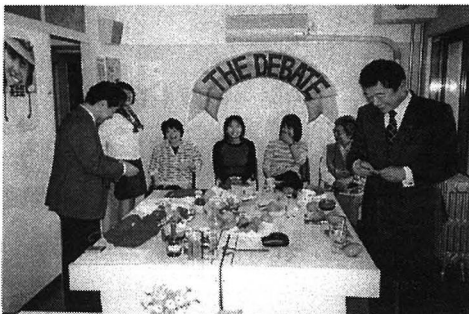
第1講 Icebreaker & Self-Introduction

—受講生の自己紹介—



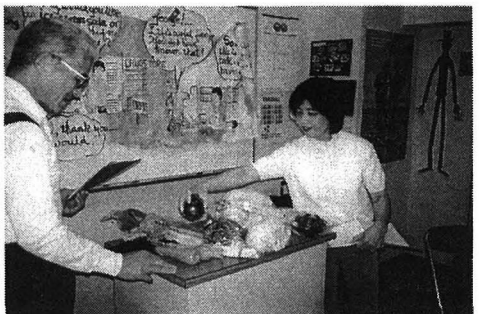
第2講 Interpersonal Relationship

—朝食づくりの実演—



第3講 Responsibility

—居間でのくつろぎを演出—



第4講 Social Activity (1)

—買い物の実演—



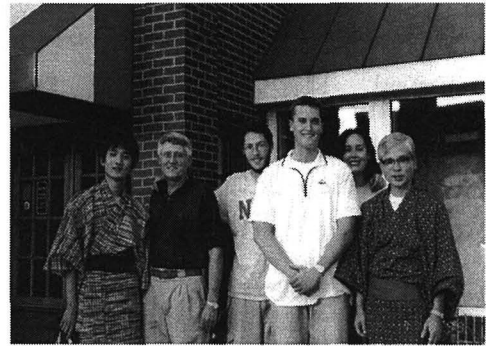
第5講 Social Activity
—「たまご」料理の実演—



第6講 Culture
—日本食を試食するゲスト—



第7講 Education
—スピーチ：「私の夢」—



最終講 Leisure
—ゲストと市内散策—

V. 結果と課題

諺に、*Rome was not built in a day.* と言うが、僅か8回(720分)の講座を行うのに、実際その数倍の準備時間を要した。1コマの講座を成立させるということは、常にそういうものなのである。

さて、この講座を振り返るときが来た。

第1講目の初端、受講生は一様に緊張の面持ちだったが、その緊張感は期せずして「自己紹介」によって払拭された。それは学校と疎遠になった社会人(平均年齢52歳)とはいえ、自らの生活体験に裏打ちされた英語が確かな手応えで、口をついて出た時のことである。緊張感をさらに和らげたのは、受講生相互のアットホームな雰囲気と信頼感にはかならなかった。

「案ずるよりも生むが易し」だったのである。

第2講目以後の授業展開、特に「教案・教材」については、懸念したほどではなかった。この点については、「教材のレベルが低めに設定され、一見して楽しいわかり易いものだった」

こと、さらに「言語活動をスムーズに行う具体的な場面や小道具に趣向が凝らされ、BGM やビデオ鑑賞など細かい工夫と配慮があってよかった」と後のアンケートに記されている。

「到達目標・評価」は予め受講生に与えておいた「チェックシート」が功を奏した。受講生はこのシートをいつでも必要なときに活用できたからである。

「授業展開」では、個人差を考えた教案・教材作りに留意しなければならなかったが、この問題は「開講に向けて」で述べたように、阻害要因にはならなかった。授業に減り張りをつけたのは、受講生の積極性だった。人は「十人十色」と言うが、同じ目標のもとに集まった彼らには、一種の結束力や問題解決意識が随所に見られた。

また、言語活動の合間に受講生の英語力とは別の面を垣間見ることができた。それは、豊富な人生経験の中で培われた広い視野と円満な良識、その深層部分に感じとることのできる「美しく老いたい」、「学ぶことの楽しさを味わいたい」といった眼差しである。

次に受講生の感想の一部をアンケートから紹介する。

- a. 学校教育現場という安心感と、わずかながら生徒さんとのふれあいの機会が持ててよかった。(57歳・女性)
- b. 久しぶりに授業を受けて、学ぶことの大切さ、新鮮さを感じ取ることができた。
「62歳・男性」
- c. 授業の「買い物」や「料理」などの場面では、実際の動作を伴うセリフがついて出なくてとまどったが、すぐに慣れ、英会話の楽しさがわかった。(54歳・女性)
- d. 単語や文法を忘れていても、英会話はなんとかできると思った。(61歳・女性)
- e. 新しい友だちができ、老夫婦二人暮らしの家庭を見直すきっかけやこれからの生活のヒントをつかんだような気がする。(67歳・男性)
- f. 私たちの学ぶ姿を見て、孫たちが励ましてくれたのが嬉しかった。(63歳・女性)

最後に、今後の取り組みでは、本稿第3章の(1)(2)を改善させなければならない。幸い、筆者は他の生涯学習講座も担当させていただいている。その教案・教材は概ね本講座のものを参考にしている。もちろん、一つの教案・教材が常に万能というわけではない。なぜなら、教案・教材は「在る」ものではなく、「作る」ものだからである。

次に、その「教案・教材」のユーティリティーの問題である。すなわち、個人差を考えながら、「日常生活の身近な話題」を「基礎的な英語表現」で発表するという学習材(学習観)の基本姿勢が、本稿第2章の(1)―(3)に応用されるならば、それは、例えば小学校の早期英語学習、中学校での英会話指導、さらに高等学校での異文化理解教育などの一環として導入できよう。

その場合、本講座のように、その実施拠点となる学校は、「学習」の場から「学習支援」の場、

さらに「教材提供」の場というふうに多面的な機能を持つことになる。その意味においては、従来の学習形態も変わる。すなわち、これまでの「教室」という概念は、フィールドワーク、自然体験、生産活動、ボランティアなどの活動拠点の一つと見なされる。

学習拠点が教室を越えれば、そこに学社融合や産学連携の必要性も出てくる。この複数の拠点では、生徒は地域の郷土芸能や伝統文化にふれる機会に恵まれる。この垣根を越えた無制限の空間に、生涯学習の拠点・原点があるのかも知れない。

以上の課題のすべてを集約、体系化した生涯学習の基盤作りは必ずしも容易なことではないが、その共通項は常に学習、すなわち生きる知恵と力を学ぶことに変わりはない。

オスカー ワイルド (Oscar Wilde) は、「大多数の人間は生きているのではなく、ただ存在しているだけ」と言う。「To Have」ではなく、「To Be」の生き方を模索、実践して、それを次代に伝えてゆく。これが生物時間を生きる旅姿、すなわち生涯学習の真の有様である。この旅に終わりはない。

注

¹ E.Faure, 1971, *Learning To Be*.

² このことについて、クワークは「The English language works pretty well in its global context today:certainly the globe has at present no possible substitute.」(R. Quirk, *English in the World*,p.6)と述べている。

³ 高等学校学習指導要領「オーラル・コミュニケーションⅠ」の「目標」を参考にした。すなわち、「日常生活の身近な話題について英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」である。

⁴ この「教案」は受講申し込みの際に手渡される。

⁵ 筆者は「教材」を、「something to teach with」と「something to teach about」の両義的に用いる。ここでは後者をさす。

⁶ (学習者の)到達目標は、予め学習指導計画案に位置づけられる。青木(1994)は「期待される到達基準を、観察可能な具体的な行動で表わす必要がある」と述べている。

⁷ 具体的なことばの使用場面を設定して、聞く・読む(理解活動)と話す・書く(表現活動)を行うこと。

⁸ ソーンダイク (E.L.Thorndike)、ガスリー (E.R.Guthrie)、ハル(C.L. Hull)などが主張する連合説に基づく。

参考文献

David Graddol (山岸勝栄 訳), 1997, *The Future of English*, 研究社。

Erich Fromm, 1976, *To Have or To Be*, 金星堂。

東 洋 他 (編), 1979, 『新教育の事典』, 平凡社。

片山嘉雄 他 (編), 1994, 『新・英語科教育の研究』, 大修館。

山田定市 (編著), 1997, 『地域づくりと生涯学習の計画化』, 北海道大学図書刊行会。

山本恒夫 他 (編), 2001, 『「総合的な学習の時間」のための学社連携・融合ハンドブック』
文憲堂。

—長寿社会の重点課題は、「生涯学習」の推進—



生涯学習時代到来！

今、人々が生涯にわたって、いつでも自由に学習でき、その成果が社会で適切に評価される「生涯学習」社会の構築機運が高まっている。

たとえば、社会人対象のリカレント教育、ボランティア活動の推進、中・高校生の校外活動の充実、などはその中心的なテーマ。

真の学習（のあり方）が今問い直されている。

常に新しいものに触発され、そこから自己啓発をしてゆく——、これこそ「生涯学習」の本質。“老いて学べば死して朽ちず”